

性労働に従事する女性たちの民族誌的研究をめぐる覚書

熊田陽子*

Notes for Ethnographic Study on Women in Sex Work

KUMADA Yoko

abstract

This article reviews some recent ethnographic studies on women in sex work around the world in order to obtain the research framework for future ethnographies of female sex workers in Japan. The issue of whether those women are hapless “victims” or free “labours” has been a long controversy among scholars in various fields. However, the ethnographic findings prove that such a search for a single and universal definition is indeed unproductive. Instead, the researchers try to identify positive or subtle acts of “resistance” in the conducts of respective women. Those acts are then carefully situated in the individual contexts through their own stories narrated in the specific spaces, at the specific moments. In the last part of the article, critical re-reading of the ethnographic works is attempted to confirm the “thickness” of the descriptions in terms of politics, culture and subjectivity, hoping to enhance the effectiveness of the valuable concept, “resistance”. With the concept of “resistance” and the improved methodology for its description, we can eventually embark on the ethnographic study on female sex workers in Japan as a meaningful project.

Keywords : female sex workers, ethnographic study, resistance, context, thick description

I はじめに

日本の性産業は巨大である。門倉が概算した性産業に流入する金額を見れば、その規模が伺い知れる。例えば、ソープランド営業ならば2005年現在で年間9,819億円、以下SMクラブは2,400億円、ファッションヘルスとイメージクラブは6,708億円、デリバリーヘルスは2.4兆円、ピンクサロンは6,457億円、アジアエステは2,089億円、「外国人売春」は226億円、そしてホテルは901億円である〔門倉 2006 : 192-193〕。これらを合算すると、性産業のうちのサービス業態にのみ限定して低めに見積もっても、実に5.3兆円前後のお金が当該市場で動いていることになる。このことは、性産業に従事する性労働者としての女性の存在の大きさをも示唆している。

しかし、そうした性労働者としての日本人女性たちを描く民族誌的研究は、皆無に等しい。先行研究は、海外から日本にやってきて性産業に従事する女性たちが、日本における「エイズ・パニック」¹⁾以降、どのようにHIV感染拡大の中心としてスティグマ化されていったかという表象の観点から行われた研究〔cf. Miller 1994, 2002〕や、ラテンアメリカ出身で日本の性産業に従事する女性たちをめぐる実態調査報告〔cf. Méndez 1998〕などに限られている。

筆者が現在遂行中の調査も、性労働に従事する日本人女性たちに関する民族誌的研究の欠落を痛感してのことである²⁾。本論の目的は、この欠落を補うための基礎研究の一環として、これまで日本以外の様々な地域を対象

キーワード：女性性労働者、民族誌的研究、抵抗、文脈、厚い記述

*平成19年度生 ジェンダー学際研究専攻

に蓄積されてきた性労働に従事する女性たちの民族誌的研究を概観し、そこに指摘される問題点を検討することにある。

II 性労働の民族誌的研究

これまで日本以外で行われてきた性労働の民族誌的研究は、それを実践する人々を、一義的に「犠牲者」とも完全に自発的な「労働者」とも規定せずに、状況論的な考察に力点を置いてきたことに共通の特徴がある。以下に具体的な先行研究のレビューから先ずはこの点を確認したい。

1 「犠牲者」か「労働者」か

性労働をめぐるのは、これまで様々に異なる立場からの主張がなされてきた——「売春は、男性による女性の搾取である」、あるいは「売春は仕事の一つである」と³⁾。こうした主張の切りあいは、1980年代中頃の「売春か労働か」という論争に顕著である。北米のフェミニズム [cf. マッキノン 1993、ドウォーキン 1987] や WHISPER⁴⁾ など当事者支援団体が、売春を行う女性たちを家父長制的社会制度や構造的暴力の犠牲者にとらえて売春の根絶を訴えてきたのに対抗し、多様な性的実践のあり方を許容すべきという主張 [Rubin 1999(1984)] や、売春婦の身体を「聖性」と「あばずれ」の両極を内包するものとして脱構築する作業 [ベル 2001]、女性が売春を行なう権利を唱えて、性に関する労働を社会貢献の一つとする擁護論 (e.g., ICPR, COYOTE⁵⁾) などが提示されてきた。

売春を家父長制的暴力だとするフェミニズムの主張に対しては、西洋における「良いセックス」と「悪いセックス」の図式 [Rubin 1999(1984)] を援用しながらサンチェスが更なる批判を展開した [Sanchez 1997]。「良いセックス」とは、ヘテロセクシャル・一夫一妻の結婚関係・出産目的のセックスを指し、「悪いセックス」とは、ホモセクシュアル・婚外性交渉・性的快楽を追求するセックスを指す。サンチェスは、売春を行う人々を犠牲者として語る女性たちは、「良いセックス」の実践者としてブルジョワ的でヘテロな女性としての自己アイデンティティを確認・確保したうえで、「他者としての娼婦」と一線を画するという。結局、自分が社会から排除される危険を回避したうえで、この二項対立的図式の永続に加担することになる。他方、単一のアイデンティティやゴールを持って性労働者のエンパワメントを図る運動が目指すものも、結局は一部のコミュニティ・メンバーの要求や経験に基づいて構築された知識に他ならず、他の多くの声が捨象されるという批判も浴びせられた [ハラウェイ 2000, cf. ゴッフマン 2001]。

2 女性たちをめぐる民族誌的研究の諸相——「抵抗」を鍵に

こうした売春をめぐる議論を受けて、人類学的な性労働研究の多くは、この「搾取か職業か」という二者択一論ではなく、状況論的な民族誌記述に基づく第三の視点を得ようと試みてきた。それは、性労働に従事する女性たちを彼女らの「抵抗の実践」の多様性という視点から捉えようとする、一群のアプローチだと総括できる。この「抵抗」——本論では構造的規制を読み替えて自分の生きる場を確保する戦術と理解する——へのまなざしにより、女性たちを完全に無力な存在へと一元化することなく、同時に、彼女たちに困難な状況を強いる社会構造的規制も批判的に検討することが可能となったと指摘することができるだろう。

2-1 ネットワークを利用した集団的「抵抗」

「抵抗」のあり方については、まず、独自のネットワークにもとづいた「抵抗」があげられる。ド・メイスは、ブラジルのリオデジャネイロにおいて、路上で売春を行う女性たちが、自らの実践をどう解釈するかによって異なるアイデンティティを獲得していく様子を検討し、彼女たちを3つのタイプにカテゴリー化した [de Meis 2002]。第一のタイプは、売春を「正当な職業」として市民の諸権利を行使しようとする「性労働者」である。だが、こうした性労働者以外にも、法的な「正当性」を主張せず、独自の連帯にもとづいて身体の安全を確保しようとする「娼婦」(whore) が存在し、これを第二のタイプとする。この女性たちは、性労働者のように、ブラジル社会において売春に付与されたスティグマを打ち消す努力はしない。だが、スティグマ化された売春の場を自らの

ものとし、それを自分の選択として受け入れる。このような娼婦たちは、場当たりのな生き方をやめて人生計画を立て、家を購入し、仲間たちと親密なネットワークを築いていく。こうして彼女たちは、暴力⁶⁾等の問題が頻発する路上において売春を行う際の安全を確保していく。第三のタイプは、性労働者と娼婦のどちらにも属することを積極的に拒否する女性たちである。彼女たちは、上述のネットワークに参入しないため、自分の力で様々な問題に対処せざるを得ず、暴力に対して弱い立場となりうるとド・メイスは指摘している。つまり、性労働者と娼婦はそれぞれ独自の抵抗の手段を有しているが、第三のタイプとされる女性たちにはそれが欠如している⁷⁾。

ブレツァーは、アメリカ合衆国フロリダ州の農業地帯における女性性労働者の身体的リスク⁸⁾について、HIV感染の問題を中心に研究を行った [Bletzer 2003]。ブレツァーは、こうした女性の多くが、暴力やレイプなどによるトラウマを抱え、いずれの場合にも、警察が頼りにならなかった経験を共有する現実を明らかにする。しかし同時に、彼女たちは、様々な方法で独自にリスクの軽減を図っている。それは、信用できる最良の客を多く獲得するなどの方法に加え、客以外の地元の男性による支援 (backup) を得ることである⁹⁾。また、性労働者たちは、同業者の女性たち、あるいは雑貨屋の店主など地元でビジネスを行う男性たちと、頻繁に情報交換を行っている。そして女性たちに不当な扱いをした客は、地元の男性らによって「困難な立場に追い込まれる」(“make it difficult for that person”) という [Bletzer 2003 : 266]。

また、スタークがニューヨーク市とアトランタ都市部の路上を中心に行った調査でも、比較的安心してサービスができる常連客を多く獲得する努力などに加え、売春婦同士が、客や性感染症に関する情報を交換しあう事例が確認された [Sterk 2000]。更に彼女たちは、過剰な客引き行為を避けるなど、路上におけるルールを遵守することで、警察に逮捕される危険を回避する。しかしスタークは、こうしたネットワークを構築できるのは、ドラッグに依存していない売春婦に限られるという。ドラッグを常用し、ドラッグを購入するために売春をする、あるいはドラッグとセックスを直接交換したりする女性たちは、早急にお金を稼ごうとしてルールを破ることが多く、ドラッグを使用しない売春婦からは疎まれ、孤立することが多いという。

2-2 個人による「抵抗」

また、組織だっていなくとも、性労働に従事する女性が個人で行う「抵抗」があり得ることに着目する必要がある。ミンは、中国本土から香港に移り住んだ女性性労働者の日常的実践と経験を、彼女たちに付与されたHIV感染源としての汚名を中心としたスティグマと、歴史的に形成された他者としての中国本土女性のイメージとの関係性から分析した [Ming 2005]。毛沢東時代以降、香港で性労働を行う中国本土出身の女性が増えたのは、「香港に行けば誰でも金持ちになれる」といった言説がメディアによって広く流されていたことや、中国本土では女性の職業選択肢が限られていることが理由であるという。ミンによれば、中国本土からの女性性労働者は、HIV感染拡大の責任を負わされたり、常に監視下に置かれたりするなど、生活環境は決して良好ではない。しかし彼女たちは、「近代的で物欲が強い」とされる香港人女性と比べて「昔ながらの女」として賞賛されることも多く、この中国本土女性のイメージを大いに利用する。そして時には、中国本土の中でもとりわけ「罪がなく」「清楚」だとして人気の高い、東北地方出身の女性と偽って稼ぎを安定させることもあるという。

オーストラリアのパスで女性性労働者たちのHIV感染リスクを調査したワデルは、彼女たちが多様な方法を用いて、仕事とそれ以外のセックスを分断していると主張する [Waddell 1996]。女性たちは、仕事でしかコンドームを使わない。また、仕事のセックスは「男性客の性的欲求を満たすために行う」と説明するが、仕事以外のセックスは「愛」「親密さ」「信頼」の表現だと語る。更に、仕事でのセックスでは、自分の性に関する経験がいかに豊富であるか客に知らせ、セックス中の主導権を握るよう操作するが、仕事でない場合は、逆にそうした経験を低く見積もって話す。また、仕事では「できる」行為を予め限定する。彼女たちがこうした線引きを行うのは、客との身体的接触が「自分の身体を汚す」可能性があると考えているからだと言われている。つまり、ワデルが記述した女性たちのこうした対策は、心身が「汚れる」ことに対する女性たちの防御策、あるいはソフトな「抵抗の実践」と理解することができるだろう。

このようなプライベートと仕事の領域を分ける行為の指摘は、他の研究においても看取される。例えば、ド・メイスが話を聞いた女性たちの中には、売春を通じて自分の私的領域が「汚染」されないように、様々な実践を行う者がいた。彼女たちの多くは、売春の場では、その人の「本質」と家系を表す洗礼名の代わりに「バトル・ネー

ム」を用い、仕事前に化粧を施すことで「真の自分」を守るのである [de Meis 2002 : 12]。

2-3 性の取引・性の交換

当該社会の当事者らが売春あるいは性労働としては認識しないところに成立するようなセックスとお金の交換の分析事例も、「抵抗」の一形態として注目に値する。コールがマダガスカルクタマタヴ社会において検討した、一部の若い女性 (*jeunes*) によるヨーロッパ人との「取引的セックス」(transactional sex) はその一例である [Cole 2004]。彼女たちは貧困を嫌い、社会的成功者となることを目標に、ヨーロッパから訪れる富裕層の男性との間に金銭的援助とセックスを取引する長期的関係を取り結ぶ。コールによれば、1990年初頭のポスト社会主義体制の到来以降、クタマタヴ社会では経済格差が拡大し、政治は混乱している。そしてそれまで成功への道と信じられていた学歴がもはや通用せず、いかに多くの物品を所有しているかが成功の証となったため、若い女性たちは、自分と家族・親族の将来の安全と安定を確保するための道具として「取引的セックス」を利用するのだという。

また、ウォイツキが南アフリカのソエトとハマンスクラルで実施した調査結果においても、クタマタヴ社会と同様に、「セックスとお金の交換」(sex-for-money exchange) が職業としての性労働とは区別して当事者たちに認識されている [Wojcicki 2002a, 2002b]。ウォイツキがこうした「セックスとお金の交換」を行う女性たちに目を向けたのは、現地の HIV 感染予防対策が、女性性労働者だけを対象に限定的に実施されていることに着目したからだ。女性たちが「セックスとお金の交換」の相手を見つける主な場所は、酒場である。そこでは、いったん女性が男性からおごられたビールを飲んだなら、彼女は必ず彼とセックスをしなくてはならないという暗黙のルールがある。ビールに口をつけた後にセックスを拒否した場合、その女性が殴られようがレイプされようが、周囲の人々は「自己責任だ」として助けようとはしない。しかし、このような場において、女性たちは自分の身を守るために様々な対策を講じるという。それは、危険を察知したらすぐさま逃走する能力を身に付ける、眠気を誘発するハーブを男性の飲み物に投入する、女性にセックスを強要しないような男性を見つける嗅覚を研ぎ澄ますなどの手段である。こうした実践の中に、ウォイツキは、「セックスとお金の交換」を行う女性たちの積極的な「抵抗」のあり方を見出している。

また、ド・ザルデュオンドらは、ハイチ都市部の研究から、慣習法による男女の結びつき (*plaçage*¹⁰⁾ やその他の男女の性的な関係を含む結びつき (e.g., *byen ak, ti zanmi, fe dezod*) において、あるいはその形成過程において、女性が経済的交換価値を持つ財産の一つとしてセックスを利用することに注目した [de Zaldundo and Barnard 1995]。こうした関係では、女性は男性に対して稼ぎと愛情の提供を求め、男性は女性に対して家事と彼女の身体へ性的にアクセスする権利を求める。この文脈において、女性が提供するセックスは実体的な支払いで補填されることになるが、その行為は性労働とは認識されていない。こうした男女関係は、一見、対等に見える。しかし実際は、男性が家事やセックスの内容に不満を覚えたなら、直ちにその女性のもとを離れて、別の女性と新たな関係作りを始めることが許容されているため、女性が男性に対し不満を率直に述べることは難しい。だが彼女たちは、自分の要求をできる限り通すために、結びつきを形成するまでの交渉期間において財産であるセックスを簡単には行わずに、男性からの譲歩を引き出す。つまり女性たちにとって、セックスとは、不均等な男女関係を是正するための「抵抗」の道具として理解できるだろう¹¹⁾。

2-4 二重の暴力の下で

以上の先行研究においては、女性たちが相対的な自由を獲得しているように描かれているのに対し、ハマーが調査したパプアニューギニア・ダル島の売春の事例は、より厳しい環境を描き出す [Hammer 1996, 1999]。そもそもダル島では、売春婦であろうとなかろうと、女性たちは男性による性的あるいは身体的暴力を頻繁に受けるという。そして、彼女たちの多くが、父親が消費するビールやお金のために「売られ」たり、セックス後の代金の未払いを経験するなど、売春においてもジェンダー的な力の格差は如実に現れている。しかし、ダル島の多数民族のクワイあるいはスキ出身の売春婦たちの中には、客を意のままに操り、地域の権力者とのパイプをも確立することで、一目置かれる存在になる者もいる。他方、植民地時代以降スティグマ化されてきた少数民族のバム出身の女性が、夫の手引きによってダル島を訪れる労働者らを相手に行わされる売春には、クワイやスキ出身の女性のような戦略の余地はない。彼女たちが売春を行うのは、*sagapari* (=「小さなマングローブの庭」) と

形容される、戸外のトイレや汚れた場所、木の茂みといった場所であり、そこではバム女性の身体に対する暴力が恒常化しているという。そして、*sagapari*での稼ぎは、夫が全て取り上げることがほとんどである [Hammer 1999: 77-78]。ハマーは、売春により女性が罹患する性感染症を含め、男性が女性に振るう暴力を「ジェンダー化された暴力」(gendered violence) とし、それを可能にし永続化させる家父長制的な規範や言説、社会構造を「ジェンダーの暴力」(gender violence) と呼ぶ。ハマーは、ダル島の女性のほとんどがその被害者であるが、最も問題が深刻なのはバム出身の女性だと主張する [Hammer 1999: 90-93]。

このような二重の暴力の問題は、ダル島の女性に限らず、アメリカ社会の周縁化されたエスニシティや階層に属し、なおかつ男女の力関係のバランスが著しく不均衡な場に生きる女性性労働者にも当てはまる。エペレは、低所得のラテン系アメリカ人が多く居住するサンフランシスコのミッション地区 (Mission District) の路上で、性労働などから生計を立てるラテン系の女性たちの HIV 感染リスクについて調査した。その結果、彼女たちの生活においては、より多くのアガリや暴力の回避など、感染よりも更に切迫した優先事項があることを確認した [Epele 2002]。つまり、彼女たちにとって HIV 感染は二次的な問題であり、コンドームを使わずに客から多くお金を取る、あるいはアガリを搾取されるとしてもボーイフレンドを作ってボディガードにすることは、彼女たちの「抵抗」の戦略的実践の一つと読むこともできる。しかし、その「抵抗」は、男性による女性へのレイプ・虐待・強盗・殺傷・HIV 感染などの「ジェンダー化された暴力」と、それを許容する男性中心主義的イデオロギーや、女性を男性に従属せざるを得ない状況に追い込む構造といった「ジェンダーの暴力」という、二重の被害のもとで実践されていた。

以上のように、性労働に関する民族誌的研究は、歴史・社会・文化・経済・政治的側面を検討し、そこにおける不平等さを指摘しつつも、積極性の違いこそあれ、女性による様々な「抵抗」のあり方が存在することを示してきた。

Ⅲ 性労働の「厚い記述」のために

Ⅱでは、「抵抗」をキーワードに、性労働に従事する女性を扱った諸研究を4つのカテゴリーに分けて概観した。これら「抵抗」の観点から行われた研究は、性労働に従事する女性たちの諸実践の中に、当人さえも気づかないような積極的な意味を見つける作業を行ったものだと評せよう。そして、この「抵抗」の分析において不可欠な「抵抗」の主体を探る作業は、個々の文脈を丁寧に分析し、個別事例を蓄積するという民族誌的アプローチでこそ可能であった。

また、個別の文脈の検討は、多様な実践を「搾取か職業か」という単一の定義に収斂させようとする論争に一石を投じるものとして評価できる。こうした定義は、社会や文化によって大きく異なるばかりか、その内部においても誰が定義するかによって大きく変わるため、必然的に状況的なものになることが明らかになったからだ。

そして、こうした諸研究の状況論的検討の作業にいくつかの改善を加えることで、より「厚い記述」を展開することが可能になると考えられる。以下では、性労働の民族誌的研究の精緻化に向けて、Ⅱにおける4つの分類に沿って、政治、文化、主体性という主に3つの視点から具体的に検討を加えたい。なお、政治の検討とは、性労働に従事する女性が「抵抗」する相手として、検討の対象を「男性」など一つに絞るのではなく、彼女たちを取り巻く様々な人々との関係における政治の詳細が、広く議論されているか否かを確認する作業である。文化の検討とは、性労働が「一般社会」とは関係ない特殊なものとして囲い込まれていないか、あるいは性労働の実践に文化が与える影響について十分な考慮がなされているか否かを確認する作業である。主体性の検討とは、「抵抗」する個人が「売春婦」や「性労働者」というレッテルに収斂、一元化され、その内部における差異が等閑視されていないかを確認する作業である。

Ⅱの2-1で取り上げた、ネットワークを利用した「抵抗」についての諸研究は、性労働に影響を与える当該地域の文化を詳細に検討することで、性労働が行われる個別の時間と空間の文脈に、女性たちの実践を位置づけることに成功した。ド・メイスの研究では、ブラジルに存在する二分化された女性観——よき母と娼婦——を十分に説明したうえで、それが女性たちの主観的自己評価とアイデンティティ形成に与える影響が明確に示されていた。アメリカ都市部における調査報告でも、スタークは、ドラッグと密接に関わる売春とそうでない売春を注

意深く分類し、現在の家父長制的なドラッグの文化が、女性たちの売春における経験にどのような影響を与えるのか明らかにした。

しかし、これらの研究に性労働者のネットワークの内部における関係性の分析が付加されたなら、より包括的な視点から彼女たちの「抵抗」を考察することが可能になるだろう。例えばプレツァーの研究では、女性たちが構築する絆が強調されるあまり、個人が「性労働者」という単一のラベルのもとに主体化され、その内部、つまり女性同士の関係に内在する権力構造の描写はほとんどない。ところが、女性たちの「抵抗」の一つである最良客の獲得には、彼女たちの間に対立を生み出す可能性がある。こうした最良の客とはすなわち常連客、しかも確保しておきたい「上質の」客ということになるが、その数は相対的に限られてくるからだ。また、支援者男性と女性性労働者の間にある権力関係の記述もほとんど欠如しているため、「抵抗」の図式が客と女性という二項対立でしか捉えられていない。折角、プレツァーは、支援者男性が常に女性の安全を確保できるわけではないことにも着目しているのだから、こうした場合に、彼／女らの協調関係をベースとした「抵抗」のあり方の一層ミクロな次元での変化と交渉過程の問題もあわせて考察すべきだったろう。

それに対して、2-2の個人的な「抵抗」の実践を扱った諸研究は、女性たちを「性労働者」として一枚岩的に表象せず、個人として描くことに成功している。また、ミンなどは、中国本土出身の女性に付与された「HIV感染源」というスティグマをめぐる政治性について、中国本土と香港の歴史的な関係の分析を行うことも忘れていない。

とは言え、ミンの研究で描かれる個人のライフ・ヒストリーに文化の次元の考察が加味されていたら、更に鮮明な結論を得ていただろう。例えば、ミンの調査報告に、中国本土出身の女性たちが持つ文化的背景に関する記述を加えれば、彼女たち個人の物語はより充実したものとなる。また、ワデルがパースで行った研究でも、女性性労働者たちが行う様々な「抵抗」の実践が、どういった文化的影響を受けて編み出されたものなのかを考察することで、彼女たちが「抵抗」を行う意味や背景について、より詳細に明らかにすることができただろう。

これに対し、2-3で取り上げた性の交換・性の取引をめぐる諸研究には、文化に関する記述が豊富に盛り込まれている。こうした研究を可能にしたのは、性の交換・性の取引の多様な実践を許容する文化的背景と、それらを職業としての性労働とは区別するイーミックな視点の詳細な状況的検討に他ならない。

その一方で、これらの研究における「抵抗」の理解は、女性たちがセックスとお金を交換・取引する実践を行うにいたるまでの過程の検討に薄いため、静態的アプローチの印象を拭えない。例えば、コールによるタマタヴの *jeunes* に関する議論では、「セックスとお金の交換」が、完全に彼女たち自身が望んだものとして描かれている。しかし、彼女たちが当の交換を行う理由には、社会における成功者となることに加え、自分の家族や親族に対する生活のサポートも指摘されている [Cole 2004: 581-584]。ならば当然、女性とその家族・親族の間の政治的な駆け引き、つまり、女性の家族が裕福なヨーロッパ人男性から提供される経済的援助への期待が醸成する過大な圧力の存在を想定でき、個人の選択として理解されていた「抵抗」は、新たな様相を見せてくることになるだろう。

2-4の二重の暴力を扱った研究は、性労働を行う女性たちの困難な状況の分析に際して、男性と女性の二項的なジェンダー対立を以って短絡的に当該地域の男性にその責任を転嫁するのではなく、困難な状況を生んだ歴史的経緯を、植民地支配、エスニシティ問題、経済格差をもたらす社会構造などをめぐる政治の視点から包括的に捕捉していた。

しかし、これらの研究では、性労働を行う女性たちの苦境と受動性が強調されるあまり、彼女たちが個として積極的に性に与していく可能性は否認された。パーカーによれば、性的な満足や興奮を表象する「エロティック・イデオロギー」は、様々な「社会的文脈において性を構成する、意味・知識・信念・実践の諸システム」である「性的文化」に包含されている [Parker 1999: 326, Parker *et al.* 1998: 420]。となれば、女性性労働者たちも、この広範な性的文化の枠組を下地に生活を営み、そこに授かったエロティック・イデオロギーにおいて定位される性的欲求を内在化していると仮定してもよいだろう。性的文化を文脈とする性への積極的関与の可能性を仮定するならば、性労働における「抵抗」の問題系も彼女たちの全体的な「生」に向けた積極的行為の一端を考える契機となるだろう。

IV おわりに

本論では、異なる地域において、様々なあり方で性労働に関わる女性たちに向き合い、その事例の蓄積から彼女らの多面的な理解を試みる民族誌的先行研究を概観し、性労働に従事する日本人女性たちの民族誌的研究に向けた枠組を模索する作業を行ってきた。先行する諸研究のレビューの結果、性労働に従事する人々について理解を深めようとするならば、彼女たちの実践を一つのことばで定義するのではなく、個別の文脈の丁寧な検討が不可欠であることが明らかになった。またこれらの研究は、既存の「犠牲者」あるいは「労働者」という図式を超えて、女性たちを「抵抗」する積極的な行為主体として読みかえることにある程度成功していた。そして、そうした「抵抗」は決して一貫したルールに従ったものではなく、むしろその場の状況に応じて交渉され、変容する、偶発的なものですらあることが示されていた。この「抵抗」への視座により詳細な検討を加えて「厚い記述」にするために、いくつかの指摘も行った。これは、「抵抗」概念の効用を十分に引き出すためには、「抵抗」を政治・文化・主体の3点から十全に記述するための方法論を再検討すべきだというオートナーの主張に通ずるものである [Ortner 2006]。オートナーは、それぞれの「抵抗」の実践は特定の時間と空間の中に文脈化される必要があり、そのためには、支配-従属関係だけでなくそれを取り巻く諸関係における政治の検討、「抵抗」を文化そのものとして理解する視点、そして「抵抗」する人々を「行為主体」として一元的に表象せず、個人として復活させる作業が必要だと指摘した。本論でも、こうした点から性労働に従事する女性たちの民族誌的研究を再検討することで、彼女たちによる「抵抗」の実践をより多角的に理解する可能性を示した。

本論で概観した民族誌的諸研究は、性労働に従事する日本人女性の「抵抗」のあり方を多様性の観点から状況論的に理解する枠組を提供してくれた。この枠組を「厚い記述」に結びつけることで、包括的な性労働の民族誌的研究を行う上での準備が整うものと確信している。

註

- 1) エイズパニックとは、1986年に性産業で働いていたフィリピン人女性がHIVに感染していたことが明らかになり、その客を追跡調査するに至った「松本事件」、1987年に異性間セックスでHIV感染した日本人女性がエイズを発症して死亡した「神戸事件」、そして、同年にHIV陽性の女性が出産し、母子感染の責任が議論された「高知事件」を指す [Miller 1994: 19-32; 池田 1993: 21-28]。
- 2) 筆者は現在、東京都渋谷区にある無店舗型営業の性風俗店において、受付スタッフとして働きながら調査を行っている。主な業務内容は、電話やEメールでの接客や対応、書類作成などの事務作業である。
- 3) 以下、英文参照文献で“prostitution”と表記された場合には「売春」、”prostitute”には「売春婦」、”sex work”には「性労働」、”sex worker”には「性労働者」ということばをあてる。日本語では“prostitution”に対して「売春」「買春」「買春」「買春」など様々な表現が存在し、その定義も確立されていない [cf. 田崎 1997]。しかし本論の目的はその定義を行うことではないので「売春」として統一することとした。
- 4) WHISPER (Women Hurt In Systems of Prostitution Engaged in Revolt = 売春制度の中で傷つき反乱を起こす女性たち)とは、女性を支配し虐待するために家長長制が作り出した制度として売春をとらえ、その根絶を目指してアメリカ合衆国で設立された団体である [デラコステ・アレキサンダー 1993: 24]。
- 5) ICPR (ICPR = International Committee for Prostitute Rights = 売春婦の権利国際委員会) や、サンフランシスコで設立されたCOYOTE (Call Off Your Old Tired Ethics = 古ぼけた道徳を捨てよ) といった組織は、売春の問題だけでなく、中絶などの権利においても、女性は自分の身体をどう扱うかについて自己決定する権利があるという観点から活動を行っている [デラコステ・アレキサンダー 1993: 23]。
- 6) ここでの「暴力」とは、知らない女性同士が売春をめぐる競争し、互いの身体を傷つけあうような喧嘩や、警察官による売春婦の殴打、殺傷などを指す [de Meis 2002: 8-11]。
- 7) この分類は理論上のものであると注記がある [de Meis 2002: 15]。
- 8) ここでの「身体的リスク」とは、ナイフや銃等の武器を使ったレイプ、合意のないセックスによる身体の損傷、こうした経験を通じた心的トラウマなどを指す [Bletzer 2003: 260]。
- 9) ブレッターは、支援者の男性をヒモ (pimp) と区別している。ヒモは女性の稼ぎだけで自らの生計を立てており、女性を服従させるような関係を築く。他方、支援者の男性たちは別に自分の仕事を持っている。女性たちが彼らに支援を頼む頻度は異なるが、彼女たちは彼らに稼ぎの一部を渡し、その見返りに危機の時には守ってもらうような、比較的対等な取引関係が結ばれている [Bletzer

2003: 267]。

10) ハイチ語の正書法では *plasaj* である。

11) 社会的に容認されるセックスの経済的利用は、ケニアのナイロビにおいて、女性が売春で得た金品をもとに世帯の長となり、独立した財産の所有者となる過程を分析した事例にも見られる [White 1991]。

参考文献

ベル、シャノン

2001(1994) 『売春という思想』(山本民雄・宮下嶺夫・越智道夫訳)、青土社。

Bletzer, Keith

2003 Risk and danger among women-who-prostitute in areas where farmworkers predominate. *Medical Anthropology Quarterly* 17(2): 251-278.

Cole, Jennifer

2004 Fresh contact in Tamatave, Madagascar. *American Ethnologist* 31(4): 573-588.

デラコステ・フレデリック、アレキサンダー・プリシラ (編)

1993(1987) 『セックス・ワーク』(山中登美子他訳)、パンドラ。

de Meis, Carla

2002 House and street. *Ethos* 30(1/2): 3-24.

de Zaldondo, Barbara and Jean Bernard

1995 Meaning and consequences of sexual-economic exchange. In *Conceiving Sexuality*. Richard Parker and John Gagnon(eds.), pp. 157-180., Routledge.

ドウォーキン、アンドレア

1998(1997) 『インターコース』(寺沢みづほ訳)、青土社。

Epele, Maria

2002 Gender, violence and HIV. *Culture, Medicine and Psychiatry* 26: 33-54.

ゴッフマン、アーヴィング

2001(1970) 『スティグマの社会学』(石黒毅訳)、せりか書房。

Hammar, Lawrence

1996 Brothels, Bamu, and *Tu Kina* Bus in South Coast New Guinea. *Anthropology and Humanism* 21(2): 140-158.

1999 Caught between structure and agency. *Transforming Anthropology* 8(1-2): 77-96.

ハラウエイ・ダナ

2000(1991) 『猿と女とサイボーグ』(高橋さきの訳)、青土社。

池田恵理子

1993 『エイズと生きる時代』、岩波書店。

門倉貴史

2006 『「夜のオンナ」はいくら稼ぐか?』、角川書店。

マッキノン、キャサリン

1993(1987) 『フェミニズムと表現の自由』(奥田暁子他訳)、明石書店。

Méndez, Marcela

1998 *Foreign Bodies*. M.A. Thesis, Sophia University, Tokyo.

Miller, Elizabeth

1994 *The Borderless Age*. Ph.D. Dissertation, Harvard University, Cambridge.

2002 What's in a condom? *Culture, Medicine and Psychiatry*(26): 1-32.

Ming, Kevin

2005 Cross-border 'traffic'. *Asia Pacific Viewpoint* 46(1): 35-48.

Ortner, Sherry

2006 *Anthropology and Social Theory*. Duke University Press.

Parker, Richard

1999 Sexual diversity, cultural analysis, and AIDS education in Brazil. In *Culture, Society and Sexuality*. Richard Parker and

Peter Aggleton (eds.), pp.325-336., Routledge.

Parker, Richard, Gilbert Herdt and Manuel Carballo

1999 Sexual culture, HIV transmission, and AIDS research. In *Culture, Society and Sexuality*. Richard Parker and Peter Aggleton (eds.), pp.419-433., Routledge.

Rubin, Gayle

1999 Thinking sex. In *Culture, Society and Sexuality*. Richard Parker and Peter Aggleton (eds.), pp.143-178., Routledge.

Sanchez, Lisa

1997 Spatial practices and bodily maneuvers. *PoLAR* 20(2): 47-62.

Sterk, Claire

2000 *Tricking and Tripping: Prostitution in the Era of AIDS*. Social Change Press.

田崎英明

1997 「プロステティテュート・ムーブメントが問うもの」、田崎英明（編）『売る身体／買う身体——セックスワーク論の射程』 pp.9-39. 青弓社。

Waddell, Charles

1996 HIV and the social world of female commercial sex workers. *Medical Anthropology Quarterly* 10(1): 75-82.

White, Luise

1990 *The Comforts of Home*. University of Chicago Press.

Wojcicki, Janet

2002a Commercial sex work or *ukuphanda*? *Culture, Medicine, and Psychiatry* 26 : 339-370.

2002b She drank his money. *Medical Anthropology Quarterly* 16(3): 267-293.

(2008年1月11日受理)